



思いやりの心を はたらかせる

私たちが生きる社会では、お互いに支え合い、助け合うというモラルが不可欠といえましょう。

そのためには、人に対する「いたわり」や「やさしさ」という心を、日常の暮らしの中ではたらかせていくことが大切ではないでしょうか。



人の痛みを感じない？



「さっこん 昨日、いじめや、ぎやんたい 幼児・高齢者への虐待など、人の痛みを感じないのではないかとさえ思えるような出来事が増えています。」

このような中、私たちは、とりわけ人に対するいたわりの気持ちをはつき発揮し、思

いやりの心を
はたらかせる
ことが、もつと
も必要なことだ
と思います。



pho. ORION PRESS

人をいたわる心

——司馬遼太郎さんのメッセージ

私は、人という字を見るとき、しばしば感動する。ななめの画^かがたがいに支え合って、構成されているのである。

『竜馬がゆく』『坂の上の雲』など、多くの歴史小説を世に送った司馬遼太郎^{しばりょうたろう}さんは、その長い作家生活の中で、二編だけ、子どもに向けた文章を書きました。

それは小学校五、六年生の国語教科書のために書かれたものです。

その一つに「二十一世紀に生きる君たちへ」があります。司馬さんは、その中で次のように述べています。

——人間は、助け合って生きているのである。

そのことでも分かるように、人間は社会をつくって生きています。社会とは支え合う仕組みということである。(中略)

このため、助け合う、ということが、人間にとって、大きな道徳になっている。

助け合うという気持ちや行動のもとには、いたわりという感情である。他人の痛みを感じることと、言ってもいい。やさしさと、言いかえてもいい。

「いたわり」

「他人の痛みを感じる」こと

「やさしさ」

みな似たような言葉である。この三つの言葉は、もともと一つの根から出ているのである。

根といっても、本能ではない。だから、私たちは訓練をしてそれを身につけなければならないのである。

その訓練とは、簡単なことである。例



えば、友達がころぶ。ああ痛かったろうな、と感じる気持ちを、そのつど自分の中でつくりあげていきさえすればよい。

この根つこの感情が、自己の中でしっかり根づいていけば、他民族へのいたわりという気持ちもわき出てくる。

君たちさえ、そういう自己をつくっていけば、二十一世紀は人類が仲よしで暮らせる時代になるのにちがいない——

(『二十一世紀に生きる君たちへ』世界文化社より)

「いたわり」と「やさしさ」の心を育て、お互いに助け合いながら生きる——このメッセージは、二十一世紀を担う子どもたちばかりでなく、現代社会の一員である大人にとっても、だれもが心に刻んでおくべき大切なことではないでしょうか。

思いやりが 人の心を救う

事故で運ばれた病院のベッドで

ぎっしりと違法駐車車の車
が並んでいました。そこ
で、道路を横切ったほう
が近道だと考え、注意し
ながら車道に身を乗り出

東京で建築設計事務所を営む北山正弘

さん（58歳）は、四年前、大きな事故に遭
いました。

その日、北山さんは所用で新宿駅から
タクシーに乗りました。目的地の近くま
で来たものの、道路が渋滞じゅうたいしていてなか
なか前に進みません。約束の時間が迫せまつ
てきてイライラしていた北山さんは、タ
クシーを降りて歩くことにしました。

タクシーを降りた北山さんは、信号の
ある横断歩道を渡ろうと、いったん歩道
に上がろうとしましたが、目の前には

しました。

そのときです。渋滞する後続車線の車
のかげから飛び出してきたオートバイに
激突されてしまいました。



「お父さん、お父さん！」

妻が呼ぶ声で目覚めた北山さんは、自分が病院のベッドに寝ていることに気づきました。

全身に痛みを感じ、体中を包帯で覆われて身動きできない中、かろうじて見える右目に、涙をこらえている妻と二人の娘の姿が映りました。

そして、少し離れたところに、髪を金色に染めた大柄な青年と、その両親らしい夫妻がいることにも気づきました。

だいじょうぶかと声をかける妻や子どもに向かつて軽くうなずきながら、北山さんは「オートバイを運転していたのは、この青年だな」と思いました。

青年のほうに顔を向けると、不安そうにこちらを見ていました。



そのとき北山さんは、激痛の中、自分が青年にかける言葉が、青年の心に大きな影響を与えるだろうと思ひ、責任のようなものを感じました。

支えられて生きている自分

北山さんは、終戦の年の昭和二十年、四人きょうだいの次男として福井県に生まれました。軍医をしていた父親は戦地で病気にかかり、帰国後は寝たり起きたりの状態で満足に働くこともできませんでした。そのため母親は昼夜の別なく、働き続けました。

北山さんは、高校卒業後、地元の自動車会社に勤めましたが、肋膜炎を患って半年ほど入院しました。その後、建築士になる決意をして上京しました。二十歳の誕生日のことでした。

上京後、昼間は建築設計事務所働き、夜は専門学校に通いました。学校では、卒業時に最優秀の褒賞を受けるほど

懸命に学びました。数年後には結婚し、仕事のほうも努力が実り、上京して九年目で独立して自分の建築設計事務所を開くことができました。

やがて北山さんは、これまで順調に來たのは自分の力だけではないと意識するようになりました。

上京後に勤めた設計事務所では、設計について何も知らない自分を一から指導してくれたうえ、夕方になると、「早く行かないと、学校に遅れるぞ」と声をかけてくれた所長さん――。

建築士になる目標を立てて郷里の村を出ると決めたとき、病弱だった自分を心配して反対した病院の院長先生や村長さん、お寺の住職さんたち。そして、専門学校を卒業し、最優秀の賞状を持って帰



郷すると、彼らは村の知人を集めてお祝いの会を開いてくれた――。

北山さんの父親は、北山さんが上京して二年後に他界していました。

病氣とはいえ、妻に苦勞をかけどおしで、さぞはがゆい思いをしていたであろう父親の気持ち――。

病氣の夫の世話をしながら、畑仕事と機織りで家を支え続け、しかもそうした

中にあつても、戦後の食糧難（しよくりょうなん）のときには物乞（ものご）いに来た人々に食事を分け与えていた母親の姿――。

北山さんは、今の自分があるのは、こうした多くの人たちのおかげだと分かっていると、感謝せずにはいられませんでした。

北山さんは、こうした人たちの姿を見て育つてきただけに、人の心の悲しみや痛みはよく分かりました。またその分、喜びや楽しみの大切さ、いたわりやさしさの大切さも感じていました。

「人は、自分一人では生きていけない。親や、親の心を持った人々のいつくしみをもらって生きている」

北山さんの胸にはいつもそんな思いがありました。

「親だったらなんと言うだろう」

自分が横たわるベッドのそばで、不安げに見つめている青年――。

よく見ると、まだあどけなさが残っていました。同時に、何かに不満を持ち、すねているようにも感じられました。何をやってもうまくいかないときの憤りや不安――目の前の青年から、そんな「痛み」を感じることができました。

北山さんはふと、「もし自分がこの子の親だったらなんと言うだろうか」と思いました。

親ならば、自分の体の痛みや苦しみ、不安はさておき、まず子どもをいたわり、心配し、守り、育てていくだろう。そう思った瞬間に、次の言葉が出ました。



「ケガ、しなかつたか?」

北山さんが、痛みをこらえて言ったその言葉は、不安と緊張の中で張り詰めていた青年の心を和らげたのでしよう。青年は大粒の涙を流しはじめたかと思うと、「すみません、ほんとうにすみませんと、わび続けました。」

気がせくまま車道を横切った自分を反省しながら、北山さんは言いました。

「不用意に道路を横断した私も悪かったんだ。そんなに気にしなくていいよ。わざわざ来てくれて、ありがとう」

一つの家族が救われた

北山さんは、三か月近く入院しました。その間、青年は父親といっしょに、たびたび見舞いに来ました。青年と話すうち、北山さんは彼のことが少しずつ分かってきました。

彼は最初の高校を二年で退学し、新しく入った高校でも欠席が多くて再び退学になるかもしれないということが分かりました。また彼の心には、厳格な父親に対する反発があることも分かってきました。同時に父親の苦しみも想像できました。

北山さんは、青年が見舞いに来るたびに、北山さん自身が苦労してきた体験や人生には夢や目標を持つことが大切なこ



と、親のほんとうの気持ちや親孝行の大切さなどについて話しました。

そのうちに、その青年の親子関係がよくなつていくことが、青年の話しぶりや態度などから感じられました。

退院した翌日、北山さんは青年に手紙を書きました。

——事故のことを振り返って悔やんで



ばかりいないで、前を向いて進み、高校生活を全うまっとうしてほしい——

しばらくして青年から返事が届きました。

——事故のことは決して忘れません。

……三学期は一日も休まないで登校し、三年生に進級できました。進級したからには、勉強をがんばって大学に入りたいと思います——

青年の父親からも手紙が来ました。そこには次のように記されていました。

——北山さんとの出会いは、あつてはいけないことだったのですが、そのおかげで家族の会話が増えました。……事故直後、病室でかけてもらった言葉で、自分たち家族がどれだけ救われたか分かりません——

多くの人の思いやりに気づく

後日、北山さんは、自分の退院の報告をするため、福井に住む九十二歳の母親を訪ねました。



そのとき北山さんは、兄嫁から、北山さんが入院中の母親のようすを聞かされました。

「雨の日も風の日も、吹雪の日でさえも、毎朝五時半に外に出て、まだ暗い東の空に向かって正弘さんのけがの回復を祈っていたのよ」

また、毎日、病院に来てくれた妻と二人の娘、仕事の報告を頻繁ひんぱんにしてくれた社員、資金繰りぐを心配して手を打ってくれた得意先の社長、神社に行ってお守りをもらってきた友人……。

「今度の事故によって、自分こそ多くの人の思いやりによって生かされていることが分かった」と、北山さんはあらためて感謝しました。

思いやりの心を はたらかせよう

恩に報いる心は人生に不可欠

私たちは、互いに支え合って生きる社会の一員として、いたわりと助け合いの気持ちを心に根づかせ、それを社会生活の中で具体的に生かしていくことが大切です。そのためには、社会人として、受けてきた恩を返していく恩返しのお返しが不可欠になってきます。

北山さんが、初対面の青年にいたわりと思いやりの心をはたらかせることができたのは、多くの人たちに支えられてきた感謝の気持ちと、他の人に返していこうとする「恩に報いる心」があったから

ではないでしょうか。

現代職業研究所所長
本多信一さん（62歳）
は、苦労を重ねたみずからの体験をもとに、三十

二年間、無料人生相談を続けています。この間、相談に訪れた人は一万数千人にのぼります。

本多さんは、著書『人生を豊かにするための「時間の使い方」』（KKベストブックス）で、次のように述べています。

——呼吸こそくという字は呼よが吐はく、吸すが吸すうことで、「吐く」外へ、吸う「内へ」の順序を表す。すなわち、出さなければ入らないということだ。しかし、人間は、人体の自然とは逆に、何かを自分の内に

取り入れることばかりに熱心だ。お金でも地位でも名譽めいよでも、取れるだけ取ろうとする。自分のことばかりに熱中し、社会を生きていながら、社会への恩返しおんがしの思いはない。

呼吸でいうと、吸う一方ですることがなければ肺がぼんぼんになって、爆発してしまう。それと同様、力と時間を外界がいがいのために出すことは、一個の生命体としては不可欠のものと思える。ここに、奉仕時間の必要性があるように思う――

本多さんは、人間にとって呼吸が自然の営みであるように、私たちは、自分のほしいものを求め続ける「利己りこ」の生き方を優先させるのではなく、周囲の人たちへ思いやりの心をはたらかせ、社会へ



の恩返しおんがしをしていく「利他りた」の行動に少しでも踏み出すことが大切であることを述べているのではないだろうか。

人間社会の一員として



私たち人間は、社会をつくって生活しています。そこでは、助け合い、支え合うというモラルが欠かせません。

助け合い、支え合うためには、「いたわり」「やさしさ」という、人を思いやる心が基本になります。

人に対する「いたわり」「やさしさ」を

心に根づかせて、身近な人たちへ思いやりの心をはたらかせていくことは、私たちが人間社会の一員として、社会へ恩を返していくことになります。

そして、そのような心づかいと行いが、自分自身をも輝かせていくことにならないでしょうか。



pho. ORION PRESS